

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号： 32677
 研究種目： 若手研究（B）
 研究期間： 2010 ～ 2012
 課題番号： 22720114
 研究課題名（和文） 19世紀後半から20世紀初期のアメリカ文学における「アメリカンガール」像の変容
 研究課題名（英文） The representation of the American Girl in American literature from the late-nineteenth century to the early-twentieth century
 研究代表者
 新井 景子（ARAI KEIKO）
 武蔵大学・人文学部・准教授
 研究者番号：20557194

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来アメリカ文学における女性像の研究においてほとんど注目されてこなかった“girl”像の特殊性に焦点を当て、19世紀後半から20世紀初期のアメリカ文学における少女・女性像を考察した。世紀転換期に流布した「アメリカンガール」と呼ばれる若い女性像を中心に、その前後の時代のアメリカ文学における少女・女性像を考察することを通して、“girl”像がいかに国家やジェンダーをめぐる境界の問題を提示しているか、また19世紀半ば以後の女性の社会的位置の変化と並行して“girl”というカテゴリーがどのように複雑化していったのかを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined the representation of “girl,” whose peculiarity has not been paid enough attention to in the study of gender in American literature. Focusing on the image of the American Girl, which appeared around the turn of the century, and the representations of girls and women in American literature before and after the turn of the century, this study revealed how “girls” raise questions about boundaries in relation to nation and gender in novels. This study also showed how complicated the category of “girl” came to be in relation to the change in gender role and the rise of women’s movement in the late-nineteenth century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：米文学

キーワード：アメリカ文学、女性像

1. 研究開始当初の背景

文学における女性表象の研究は国内外において非常に重要な分野であり、フェミニズムの視点やクイア理論の視点など様々な観

点から研究されてきたが、特に近年、伝統的な女性表象研究を新たな視点から捉えなおす試みとして、世紀転換期のアメリカに流布した「アメリカンガール」と呼ばれる女性像

が注目され始めている。「アメリカンガール」像は、白さ、若さ、美しさ、イノセンス、富などを象徴する「タイプ」として構築され、Charles Dana Gibson らのイラストレーターによって多くの雑誌の挿絵に描かれた他、Richard Harding Davis らの大衆文学によって普及し、女性の美や「アメリカ人らしさ」のモデルとして重要な役割を果たした。19世紀後半の女性の「タイプ」化については、Lois W. Banner、Martha Banta、David Jeremiah Slater、Martha H. Patterson らによる先行研究があり、ここでは「アメリカンガール」像がいかに「WASP」のモデルとして、いかに「女性らしさ(femininity)」のモデルとして、あるいはいかに「新しい女性」像のモデルとして社会的・文化的に構築されたかといった問題が考察されてきた。しかしこれらの先行研究においては、「アメリカンガール」像がなぜ「ウーマン」ではなく「ガール」と呼ばれたのか、あるいはなぜ世紀転換期の「アメリカンガール」が子供ではなく専ら結婚前の若い女性を指しているのか、といった点は注目されてこなかった。それに対し報告者は、「なぜ“girl”なのか」という問いを発端として、“child”とも“woman”とも異なる“girl”というカテゴリーの表象やその変容に注目し、世紀転換期の「アメリカンガール」像の研究を続けてきた。本研究は、以前からの報告者の研究をさらに発展させたものである。

2. 研究の目的

(1) 1920年代のアメリカ文学におけるアメリカンガール表象：世紀転換期の「アメリカンガール」像が、1920年代にいかなる変容を遂げたかについて考察する。

(2) 1850-1870年のアメリカ文学におけるアメリカンガール表象：ヴィクトリア朝時代に流行した家庭小説に加え、特に Nathaniel Hawthorne や Louisa May Alcott の作品に描かれている少女・女性像に注目し、文学においてアメリカ女性、特に“girl”がどのように描かれてきたか、またその表象が「アメリカ」表象にいかに関係してきたかを考察する。

(3) 19世紀後半から20世紀初期のアメリカ文学における「アメリカンガール」像の変容：(1)、(2)の結果と以前からの報告者の「アメリカンガール」像研究を合わせ、19世紀後半から20世紀初期のアメリカ文学において「アメリカンガール」像がいかなる変遷を辿ったかを明らかにする。それを通して、

アメリカ文学・文化において“girl”という概念がどのように変容したか、また女性表象の流れの中で“girl”がいかに位置づけられるかを分析・考察する。

3. 研究の方法

(1) 1850年から1920年代のアメリカ文学において「アメリカンガール」の問題に関わっている小説を細かく分析・考察する。

(2) (1)を進める上で、同時代の雑誌などの記事や挿絵などにみられるアメリカンガール表象とも比較する。

(3) 文学作品関連の資料や雑誌資料などを考察するために、数回アメリカにて資料収集・調査を行う。

4. 研究成果

本研究の主な成果として、次のものがある。

(1) Edith Wharton の *The Age of Innocence*(1920) で描かれる女性像を考察し、世紀転換期の「アメリカンガール」像のタイプと比較しながらウォートンの国家観について考察した。これまで、本書に登場する2人の女性(メイ、エレン)はそれぞれアメリカ、ヨーロッパを示しているとされることが多かったが、本研究ではそれぞれの女性像に異なる「アメリカ」像が付与されているとの立場から、2人の女性像を再検討した。一方で、メイは世紀転換期の「WASP」のモデルとしての「アメリカンガール」を示している。それに対し、エレンは「異国風」と描かれつつ、ウォートンに先立つアメリカンガール像の作者であるヘンリー・ジェイムズが描いたような「アメリカらしさ」を示す人物として提示されている。このような2人の女性像の考察を通して、作品中でいかにアメリカ/非アメリカの境界が曖昧にされ、またそこにウォートンのいかなるアメリカ観が表れているかを検討した。成果は名古屋アメリカ研究夏期セミナー(NASSS 2011)分科会II(文学・文化部門)にて発表し、論文“Turn-of-the-Century Empire-Building and the Icon of the American Girl-Edith Wharton's Critique of Americanness in *The Age of Innocence*”にまとめた。

(2) Nathaniel Hawthorne の *The Marble Faun*(1860)における「アメリカンガール」像を考察し、そこに表れるホーソーンの国家観およびジェンダー観を探った。*The Marble Faun*における女性像については、これまで特

に家父長制に抵抗する「ダークレディ」ミリアムに焦点が当てられる一方、ヒルダは専らヴィクトリア朝的な「家庭の天使」あるいは芸術家に劣る「模写画家」とみなされてきた。それに対し本研究では、当時流行していた「ヨーロッパを訪れるアメリカンガール」という文学テーマからヒルダ像を再考することを通して、小説内でしばしば「ニューイングランドの娘」と呼ばれるヒルダがいかに「アメリカ」像を示す役割を果たしているか、さらにヒルダの示すアメリカ像にホーソンの複雑なジェンダー観がどのように反映されているかを考察した。その結果、ヒルダが作品内で国家とジェンダーの境界を揺るがす存在として位置付けられること、またヒルダがヴィクトリア朝的な“girl”像と世紀転換期の“girl”像との間に位置づけられることを論証した。研究の成果は、日本ナサニエル・ホーソン協会(2012年)、国際学会 *Conversazioni in Italia: Emerson, Hawthorne, and Poe* (2012年) で発表し、論文としてまとめたものを現在投稿中である。

(3) Edith Wharton の *The House of Mirth*(1905)における「アメリカンガール」像を考察し、本小説の中でいかに“girl”像が、特にジェンダーの観点から境界を揺るがす役割を果たしているかを考察した。本作品については、これまで多くの研究者が、フェミニズム批評の立場から、ウォートンが家父長制のジェンダーポリティクスを批判していると評価してきた。一方最近では、ウォートンが主人公リリーの中に「社会的慣習としての結婚を拒む」というニューウーマン的な姿勢を描きつつ、当時の保守的な読者層からの批判を避けるため、作品の結末をコンヴェンショナルな結婚物語の構造とする戦略をとったとする読み方も提示されている。このように本作品のジェンダーをめぐる批評は「リリーと結婚の問題」を中心に論じられ、いずれの立場にしても、その前提となっているのは、「男性」と「女性」という対立軸であった。それに対して本研究では、作品に登場するもう一人の“girl”像であるガーティという人物に着目し、リリーとガーティのかかわりを追うことで、本作品に示される“girl”像の複雑性を考察するとともに、作品の中で異性愛関係がどれほど固定的なモデルなのかということを検討した。その結果、リリーが異性愛ではなくシスターフッドの中で生きるという別の選択肢が物語の中に埋め込まれているということを論証し、さらにリリーの「選択」が未解決のまま宙吊りに

なっていることで、作品の表に見える異性愛プロットがいかに不安定になっているかという点を明らかにした。成果は、東大英文学会総会にて発表した。

以上の研究により、19世紀後半から20世紀初期のアメリカ小説におけるアメリカンガール像研究の基礎を固めることができた。その中で特に、19世紀半ばのヴィクトリア朝期から世紀転換期に至る過程は、社会が急激に変化すると共に女性運動がさかんになる時期でもあり、“girl”像がとりわけ複雑な位置にあることが明らかになった。

本研究の学術的特色は、アメリカ小説における女性像研究の流れの中で特に“girl”像の特殊性に着目した点である。「子供」とも「大人の女性」とも異なる“girl”像を不安定なカテゴリーととらえ、それが国家やジェンダーをめぐる様々な境界をいかに揺るがしているかを探る視点は、これまで発表した論文や講演においても評価を受けてきた。アメリカ文学における「アメリカンガール」像に注目した研究は、個々の作品・作家に関するものとしてはみられるものの、文学史における女性表象の変遷と結びつけて大きく流れをとらえる研究については未開拓の部分が多い。そこで今後も、今回の研究を深める形でアメリカンガール研究を進めると共に、これまで得られた成果を元に、書籍としてまとめるべく、準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Keiko Arai, “Turn-of-the-Century Empire-Building and the Icon of the American Girl—Edith Wharton’s Critique of Americanness in *The Age of Innocence*—”, *Nanzan Review of American Studies*, 査読無、Volume 33, 2011, 239-250

[学会発表] (計6件)

- ① 新井景子, “The American Girl Abroad: Nation and Gender in *The Marble Faun*”, *Conversazioni in Italia: Emerson, Hawthorne, and Poe*, 2012年6月9日、イタリア・フィレンツェ
- ② 新井景子, 「ホーソンのアメリカンガール像—*The Marble Faun*における国家とジェンダー」、日本ナサニエル・ホーソン協会第31回全国大会、2012年5月25日、日本大学文理学部キャンパス
- ③ 新井景子, 「境界を揺るがすものとしての『ガール』像—Edith Wharton, *The House of*

Mirth再読一」、東大英文学会総会、2012年3月17日、東京大学本郷キャンパス

④ 新井景子、 “Turn-of-the-Century Empire-Building and the Icon of the American Girl-Edith Wharton’s Critique of Americanness in *The Age of Innocence*”、名古屋アメリカ研究夏期セミナー (NASSS 2011) 分科会 II (文学・文化部門)、2011年7月24日、南山大学

⑤ 新井景子、「世紀転換期アメリカのネーション・ビルディングと『アメリカンガール』像」、武蔵大学人文学会研究会、2010年12月16日、武蔵大学

⑥ 新井景子、「*The House of the Seven Gables* における女性、国家、アメリカンデモクラシー」、日本ナサニエル・ホーソーン協会第29回全国大会ワークショップ「*The House of the Seven Gables* を読む」、2010年5月28日、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 景子 (ARAI KEIKO)
武蔵大学・人文学部・准教授
研究者番号：20557194

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：